

2008～2010 年度活動報告

◎公募研究テーマ

「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」

◎組織およびメンバー

- ・申請者：
高松洋一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授）
- ・研究構成員(2010年4月1日現在)：
清水保尚（東京外国語大学外国語学部非常勤講師）
渡部良子（東京大学文学部非常勤講師；東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー）
齋藤久美子（慶応義塾大学言語文化研究所非常勤講師；東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー）
- ・研究協力者（五十音順）
阿部尚史（東京大学大学院総合文化研究科グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」・特任研究員）
岩本佳子（京都大学大学院文学研究科博士課程）
江川ひかり（明治大学文学部教授）
熊倉和歌子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士課程）
今野毅（北海学園大学・札幌学院大学非常勤講師）
佐治奈通子（京都大学大学院文学研究科修士課程）
水田正史（大阪商業大学総合経営学部教授）

◎研究の目的

歴史学において、社会経済史や財政史など数量的な研究を行なうためには、史料として帳簿を利用することが必須である。しかし今般のイスラーム史研究にあつて、テキスト主体の文書に関する知識はある程度蓄積されているものの、帳簿の史資料学的研究は国際的に見ても未開拓と言ってよい。とりわけ喫緊の課題は、帳簿の理解に不可欠な簿記術に関する研究である。

イスラーム圏の帳簿史料の技術的原理を解明する手がかりとなるのが、14世紀のモンゴル支配下のイランで確立されたと考えられるイラン式簿記術である。歴史的イラン地域では、イスラーム受容以降、宗教的・学問的権威言語であるアラビア語による官僚技術の影響を受け、ペルシア語の術語と、アラビア語の数詞の崩し書きから生まれた独特の数字で特徴づけられる簿記術が発達した。この簿記術は、東はムスリム諸王朝支配下のインド、西はオスマン朝を通じてアナトリア、バルカン、さらにはアラブ地域においても在来の簿記に取って替わることとなった。本研究は主として豊富な実例が伝存するオスマン朝の帳簿群に依拠しつつ、近代に複式簿記に駆逐されるまでイスラーム圏でスタンダードであったイラン式簿記術の諸原理を体系的に解明することにより、帳簿史料の性格と内容を正しく把握し、数量的研究のための基盤を提供することを目的とするものである。

◎2008年度

1. 研究会の開催

会場はすべて東洋文庫拠点(豊島区駒込1-3-1 メリノ六義園ビル5階)である。

第1回 2008年11月27日

「研究事業の構想と今後の活動方針について打合わせ」

報告者：高松洋一

第2回 2008年12月15日

「オスマン朝軍事リザク台帳の史的考察」

報告者：熊倉和歌子

第3回 2009年1月19日

「Furughistan とペルシア語「財務・簿記術指南書」」

報告者：渡部良子

第4回 2009年3月26日

「海外調査成果報告」

報告者：清水保尚

熊倉和歌子

2. 国際ワークショップの開催

日時：2009年2月25日 午後3時から午後6時

会場：東京外国語大学本郷サテライト(東京都文京区本郷2-14-10)

テーマ：「“Cizye and Avariz tax registers and their place in the Ottoman fiscal and administrative practice” (オスマン朝下で作成された帳簿群：ジズヤ台帳を中心に)」

発表者：エヴゲニー・ラドゥシェフ (ビルケント大学、トルコ共和国)

高松洋一

<概要>

本ワークショップは、文部科学省「人文学および社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」東洋文庫拠点公募研究の一環として2009年2月25日に開催された。

ワークショップのはじめに公募研究の代表者である高松洋一氏から、研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」の趣旨説明が行われた。その中で高松氏は、オスマン朝下で作成された帳簿が、ペルシア語起源の用語で記述された複雑なイラン式帳簿であることを指摘し、このような帳簿を利用した研究を行うためにはまず帳簿自体の体系的な研究が必要であると述べた。

今回のワークショップでは、エヴゲニー・ラドゥシェフ氏を迎え、オスマン朝下で作成された帳簿群の中でも特にジズヤ台帳とアヴァールズ台帳という2種の台帳について、その基本的な構造やオスマン朝財務システムにおける位置づけについて解説を受けた。エヴゲニー・ラドゥシェフ氏は、ソフィアの国立図書館の東洋学部門の責任者として長年オスマン朝の様々な台帳の研究に従事し、現在はトルコのビルケント大学においてオスマン古文書学および社会経済史を専門としている。

◆講演内容

1. オスマン朝における初期の税制：租税台帳 (tahrirs) による財源査定
2. 国庫再編：タフリールを超えて
3. ジズヤ税とアヴァールズ税：財源査定と納税者の登記
4. ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳：詳細と要約

5. 人口統計学と宗教民族学において、ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳の数値をどのように扱うべきか

ラドゥシェフ氏は図表を用いてオスマン朝の社会構造を簡潔に説明した後、スィヤーカト体で書かれた実際の明細帳を用いてその様式を説明した。その中で強調されたのは、ハーネ (hane) の数から人口を推定することの危険性である。従来多くの研究者によってハーネの数を基にした人口推定が行われてきたが、一世帯あたりの人数を何人と考えるかについてはいまだ統一した基準がなく、そのためそこから得られる人口は研究者によってずいぶん差がある。しかしラドゥシェフ氏は、一世帯あたりの人数は調査地域の気候条件によって変動するものであるため、オスマン朝支配地域全体に共通する基準を設定することは不可能であることを指摘した。

またラドゥシェフ氏は、同年代・同地域について作成されたジズヤ台帳とアヴァールズ台帳をつき合わせ、その地域の一世帯あたりの人数を推定してみせた。しかしこのように同時代・同地域についての台帳がそろふことは奇跡的なことであり通常は検討できないこと、ジズヤ台帳は非ムスリム世帯についてしか情報を得られないこと、アヴァールズ台帳には未亡人世帯主やヴォイヌクなどの特権的なキリスト教徒世帯主が含まれていないことなどの理由から、この2種の台帳を用いて人口推定を行う際には、この数値が絶対的なものではないという留保をつける必要があると述べた。

今回のワークショップは、従来の人口統計学的研究に一石を投じる大変興味深い内容であった。今後帳簿自体の研究が進むにつれ、益々それを利用した研究の精度も上がっていくことだろう。ラドゥシェフ氏の長年の研究の一端とブルガリアの古文書学の成果に触れることのできた素晴らしい1日であった。

(文責：佐治奈通子／京都大学大学院修士課程)

3. 講演会の開催

以下の講演会を開催した。なお本講演会は東京大学東洋文化研究所との共催事業である。

日時：2009年2月24日 午後4時から午後6時

会場：東京大学東洋文化研究所(東京都文京区本郷7-3-1)

テーマ：「ブルガリアにおけるオスマン古文書史料について(東文研セミナー)」

発表者：エヴゲニー・ラドゥシェフ (ビルケント大学、トルコ共和国)

鈴木董 (東京大学東洋文化研究所教授)

<概要>

エヴゲニー・ラドゥシェフ氏は、ソフィアの国立図書館東洋学部門の責任者として、長年オスマン朝の文書史料を利用した研究に従事し、現在、トルコのビルケント大学で教鞭をとっている。ブルガリアの科学アカデミーで博士号（歴史学）を取得し、専門は、オスマン朝の古文書学と社会経済史である。

2月24日の東大東文研における研究会では、ブルガリアのオスマン文書館について、その創設と整備、所蔵史料を中心とした、以下のような報告が行なわれた。

ブルガリアは、1878年に自治権を獲得すると、翌年には、国立図書館をソフィアに創設し、同時に、バルカンではじめての文書館を創設した。ブルガリアにおけるオスマン語文書の収集・保存の動きは、極めて早かったが、当初文書館が所蔵するオスマン語文書は、ブルガリアに存在する地方文書を中心としたものであり、その分類・整理は、20世紀初頭までほとんど進展しなかった。

しかし、戦間期に重大な変化が生じた。1931年、反故紙として大量のオスマン語文書が、トルコからブルガリアの製紙工場へと販売・移送され、これを察知したトルコ政府とブルガリア政府の間で、その所有権をめぐる激烈なやり取りがおこなわれた。さらに、当時ヨーロッパで台頭してきたナチス・ドイツは、ブルガリアを取り込むべく、軍産学の広範囲にわたる連帯を強める一方、トルコをも自陣営に引き込むべく、ブルガリアに移送された文書をトルコへ返還するよう、ブルガリア政府に圧力をかけた。

結局、移送されてきた文書の一部はトルコに返還されたが、この事件によって、ブルガリアは、オスマン朝中央で保管されていた多数のオスマン語文書を入手することになった。現在、ソフィアの文書館には、およそ100万点のオスマン語文書が所蔵されている。その数は、イスタンブールの総理府オスマン文書館の1億点という所蔵数には及ばないが、他に類例のない、独自の情報を伝える史料がある。例えば、イェニチェリに関わる100点ほどの文書群は有名である。

また、ドイツとの学術交流を通じて、ブルガリアは分類方法とカタログ作成方法を学んだ。このことは、オスマン語文書の整理を進め、それを利用した研究をおこなう上で、大きな役割を果たした。今日使用されている文書館のカタログは、この時の経験を踏まえ1950年代に作成されたものである。加えて、1993年には、ブルガリアとトルコの学術交流がはじまり、両国の文書館に所蔵されている史料の相互複写・交換もおこなわれるようになった。

第二次世界大戦後のブルガリアでは、オスマン語文書を利用した研究が本格的に進められていくとともに、多くの業績が発表されていった。しかし、依然として、オスマン支配については、圧政とみなす否定的評価がくだされていた。例えば、住民のイスラームへの改宗は、自発的なものではなく、強制に基づくものであるという理解がそれである。このようなオスマン支配に対する否定的評価は、19世紀以降のナショナリズムと冷戦下のイデオロギー対立の影響を強く受けたものであった。しかし、今日、ブ

ルガリアにおいても、一次史料に基づく再検討によって、従来までのオスマン支配への否定的評価は、徐々に見直されつつある。

以上のラドゥシェフ氏の報告を踏まえて、参加者から、第二次世界大戦の戦災がブルガリアのオスマン文書館に与えた影響、ブルガリアにおけるイスラーム法廷台帳の残存状態などに関する質問がなされた。また、ラドゥシェフ氏のジズヤ台帳、アヴァールズ台帳といった、財政関係の文書を利用した研究の意義と今後の展望についても、活発な質疑応答がおこなわれた。その際のラドゥシェフ氏による共同研究の呼びかけは、大変印象深いものであった。

すなわち、ジズヤ台帳やアヴァールズ台帳といった史料の分析は、前近代の人口の大部分を占めていた村人たちの世界と、オスマン朝の統治体制を理解する上で、不可欠であるが、これらの史料は、様々な国や地域の文書館に膨大な数が現存しており、その調査・分析には大変な時間と手間がかかる。そのため、共同研究が望まれる。ただし、この共同研究は、単なる調査・分析にとどまらない、重要な意義を有している。なぜなら、かつてオスマン朝に関わるバルカン諸国の研究は、排外的なナショナリズムと結びつき、敵をつくりだすものであった。しかし、この共同研究は、敵をつくるのではなく、研究者相互の協力を前提とし、人と人との連携を生み出すものである。オスマン社会経済史研究における共同研究は、このような大きな可能性をも含んでいるのである。

終了予定時刻を過ぎたため、研究会は一応お開きとなったが、場所を移しておこなわれた懇親会でも、そしてホテルへのお見送りの際にも、ラドゥシェフ氏と参加者との間では、研究に関わる話題はつきることはなかった。今回の研究会は、ブルガリアのオスマン文書館に所蔵されている史料の重要性と可能性、さらにラドゥシェフ氏の学識の深さを、参加者に強く認識させるとともに、ラドゥシェフ氏とのなお一層の交流をのぞませるものであった。

(文責：今野毅／北海学園大学・札幌学院大学非常勤講師)

4. 海外資料調査

◆エジプト・アラブ共和国、トルコ共和国における資料調査

期間：2009年1月23日(金)～2月25日(水)

国名：エジプト・アラブ共和国、トルコ共和国

出張者：熊倉和歌子(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士課程)

<概要>

今回出張では、エジプト及びトルコの文書館に所蔵されているオスマン朝期に作成された土地台帳を調査した。またエジプト国立文書館や写本室が移転したばかりのエジプト国立図書館新館の近況について

でも調査を行なった。

今回の主要な調査は、エジプト国立文書館 (Dar al-Watha'iq al-Qawmiya) に所蔵されている『軍事台帳』全 14 冊の調査と複写であった。この台帳は 16 世紀オスマン朝治下のエジプトで編纂されたもので、非国有地として確定された私有地やワクフ地を登記するための台帳であった。この台帳の特異な点は、その土地のマムルーク朝期の状態についての情報が詳細に記されている点である。報告者は以前からこの台帳の情報を集めていたが、今回の調査ですべての台帳の情報を得ることができ、必要部分を複写することができた点で非常に有意義な調査となった。

さて、国立文書館の利用に際して、その規定が半然としないため利用しにくいという声をよく耳にする。ここではそうした利用上の障害が少しでもなくなるよう、今回得た情報を書き留めておきたい。

まず当館利用の際に提示する閲覧許可証についてであるが、閲覧許可証を既得していても発行年月日が 2、3 年以上前だと再発行を要求されるので注意されたい。継続的な利用者は多少発行年が古くても黙認される傾向があるが (報告者は 2005 年発行の許可証を未だに利用している)、断続的利用となるとこまめに更新する方が安全。次に利用するのがいつになるかわからないという場合は、帰国前に再発行申請をすることをお勧めする。(閲覧許可証の発行には通常 4~6 週間かかる) そうはいつても、前回再発行申請をしないで帰国してしまった場合は、閲覧や複写を断られても、くじけずに「研究題目は以前から変わっていない」ということを熱心に主張してほしい。(基本的には研究題目が変わらなければ閲覧許可証は再発行する必要はない) 閲覧希望者の閲覧許可証を見て閲覧を許可するか否かの判断は、閲覧室に座っている館員の個人的な判断に委ねられているため、経緯をしっかりと話せば理解を示してくれるはずだ。

同館には複写サービスがあり、これを利用する研究者も多いと思う。しかしこれにも規定があり、史料一件につき全体の三分の一まで、かつ閲覧申請書に記入する研究題目一件につき 100 枚までと決められている。複写した枚数は館員がノートに書き留めている。また閲覧許可証の発行年が古いと申請を受け付けてくれないことがある。(これも説得次第で道が開ける可能性はある)

現在当館はデータ化に向けて所蔵資料の再整理、修復を行っており、調査に赴いた際は目当ての『軍事台帳』は修復中のため閲覧できないと言われた。しかし短期間の滞在であることを伝え懇願したところ、便宜をはかってくれることになった。しばらくはこのような状態が続くようなので、文書館を利用される方は注意が必要である。

[文書館の開館時間]

月曜日～木曜日 9:00-18:00 (夏季は 9:00-19:00)

土曜日 (閲覧のみ) 9:00-15:00

金曜日 閉館

*土曜日は閲覧のみ可能。申請はできない。

*閉館時間の30分前には退館を求められる。

今回の調査では、写本室が移転したばかりのエジプト国立図書館新館 (Dar al-Kutub) も調査し、アラビア語及びトルコ語写本の調査、複写を行なった。国立図書館新館はバーブ・アルハルクのイスラーム芸術博物館を改装した建物内に同博物館と併設されている。外見は伝統的なイスラーム建築のスタイルだが内部は近代的な内装で、そのギャップに驚かされる。ここで調査をする際は、受付でパスポートと荷物を預け、受付簿に必要事項を記入するだけで入館することができる。マイクロフィルムを閲覧する順序は、まず検索用PCで目当てのマイクロの請求番号など申請に必要な情報を検索し、閲覧申請書に記入する。それを近くにいる館員に渡すとマイクロを持ってきてくれるので、その館員と共に隣の閲覧室に入り閲覧する。館員の対応はとても親切で、分からないことをたずねると丁寧に教えてくれた。

複写料金は、A4紙焼き：学生0.6LE、一般1LE、A3紙焼き：学生0.75LE、一般2LE、CD（一枚あたり）：学生1LE、一般2LE。今回CDでの複写を請求したが、指定日の2日後にちゃんと出来上がった。ただし聞くところによると、指定日に出来ていないこともあるので注意が必要のようだ。

PCでの検索が容易になったことや、マイクロリーダーが新品であること、またCD複写が安価でできるようになったことなど、利用者にとっては以前に比べて使いやすい環境になったといえるだろう。是非より多くの研究者に利用され、よりよい図書館になっていって欲しいものである。

[国立図書館開館時間]

日曜日～木曜日 9:00-16:00

*金・土は閉館日

◆トルコ共和国における資料調査

期間：2009年1月25日（日）～2月23日（月）

国名：トルコ共和国

出張者：清水保尚（東京外国語大学オープン・アカデミー講師）

<概要>

報告者は、2009年1月25日から2月23日までトルコ共和国のイスタンブール市に所在する研究機関で資料調査及び収集をおこなった。調査機関は総理府オスマン文書館とスレイマニエ図書館である。この調査は、文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」の委託費による「イスラーム地域研究」にかかわる共同研究課題の公募事業の一環で、高松洋一を研究代表者とする「イ

スラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」という研究課題を遂行するためのものである。

資料の調査と収集の上で、スレイマニエ図書館では、財務術と簿記術に関するペルシア語とオスマン語の写本を中心に収集した。総理府オスマン文書館では、帳簿の具体的な実例を知るため、租税台帳、会計簿、日々出納簿といった帳簿を中心に資料の収集をおこなった。このほか研究を進める上で必要な出版書籍を購入した。

高松の研究課題の趣旨説明、研究構成員の渡部良子によるペルシア語財務術・簿記術指南書に関する研究報告に基づき、スレイマニエ図書館では、オスマン朝の簿記術に影響を及ぼしたと考えられるペルシア語の財務術・簿記術指南書の写本と、そうした作品の影響下で著されたと考えられる、オスマン朝治下の15-16世紀に記された同ジャンルの写本とを収集した。前者の代表例は、アブドラー・ブン・ムハンマド・ブン・キヤー・マーザンダラーニー、ファラク・アラー・タブリーズィーの作品である。後者としては、オスマン朝治下でハリル・ブン・イブラヒムが著したペルシア語作品とそのオスマン語訳、ムヒッディン・ムハンメド・ブン・ハーッジ・アトマジヤの作品などである。

総理府オスマン文書館では、報告者の問題関心に則し、シリアのアレッポとその周辺域と関わる租税台帳、会計簿、日々出納簿を中心に収集した。本報告者の専門である徴税請負に関しては、その方法を介した税の納付を知る上で重要なアレッポの日々出納簿、各都市と村の税収の割当先を記す租税台帳を収集した。租税台帳は県単位で作成されおり、アレッポ財政管区全体の情報を知るには不十分であるので、アレッポ県に加え、ビレジキ県、ハマ県、ホムス県などに関わる台帳を収集した。こうした資料に加え、地域における富の還流を考える上で重要なメッカ・メディナの両聖都に品品を送るため設定されたワクフ(寄進財)に関する、アレッポの会計簿を可能な限り網羅的に収集した。また税収の一部は俸給や年金といった形で用途が特定化されおり、このように各個人に税収の一部を受取る権利を承認した文書の調査を実施した。

5. ウェブサイト作成・公開

研究成果の情報発信に向けてウェブサイトを作成・公開した (<http://www.tbias2.jp/>)

◎2009年度

1. 研究会の開催

会場はすべて東洋文庫拠点(豊島区駒込 1-3-1 メリノ六義園ビル5階)である。

第1回 2009年4月22日

「Hajji Fath ‘Alī Khān Donbolī の遺産目録研究：19世紀タブリーズ有力者の資産とシャリーア文書における遺産分割「会計」について」

報告者：阿部尚史

第2回 2009年5月27日

(1) 「Khalīl b. Ibrāhīm, Miftāh-i Kunūz-i Arbāb-i Qalam wa Mišbāh-i Rumūz-i Ašhāb-i Raqam (ms. Süleymaniye: Şehid Ali Paşa 1978)」

報告者：渡部良子

(2) 「Şehid Ali Paşa1973(Hayrūddin 著, Pīr Maḥmūd el-Edrenevī el-Müştehir bi’ ş-Şīdkī 訳, Miftāh-i künūz-ı erbāb-ı kalem ve mišbāh-ı rümūz-ı ašhāb-ı raqam)について」

報告者：高松洋一

第3回 2009年6月24日

「14世紀ペルシヤ語簿記術論に関する基礎的研究：ヴァルター・ヒンツ校訂 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat の解説・講読のために」

報告者：阿部尚史

第4回 2009年10月21日

(1) 海外調査報告

イラン 高松洋一

トルコ 齋藤久美子

(2) 「前近代ペルシヤ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第4章の試訳と考察」

報告者：阿部尚史

第5回 2009年11月18日

「前近代ペルシヤ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat (ヴァルター・ヒンツ校訂) p.26” varaq” から」

報告者：阿部尚史

第6回 2009年12月16日

「前近代ペルシヤ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat (ヴァルター・ヒンツ校訂) p.27 第5章から」

報告者：渡部良子

2. 国際ワークショップの開催

以下の国際ワークショップを開催した。

(1) 「スィヤーカト書体帳簿講読セミナー」

日時：2009年7月27日-7月29日 午後3時から午後6時30分

会場：東京外国語大学本郷サテライト4階セミナー室（東京都文京区本郷 2-14-10）

講師：エヴゲニー・ラドゥシェフ（ビルケント大学客員教授、トルコ共和国）

<概要>

本セミナーはイスラーム地域研究東洋文庫拠点公募研究「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」の一環として2009年7月27日から3日間開催された。セミナーの講師を務めたエヴゲニー・ラドゥシェフ氏は、オスマン朝支配下のバルカン半島、特に現在のブルガリアにあたる地域を主なフィールドとして長年、オスマン朝の古文書と社会経済史の研究に携わってきた研究者であり、2009年2月にもイスラーム地域研究東洋文庫拠点の招聘で、日本で講演及びワークショップを行っている。（2月24・25日両日に行われた講演及びワークショップの内容については、イスラーム地域研究東洋文庫拠点ウェブサイトに掲載されている「研究会・報告」のページを参照されたい。）常に研究の第一線で活躍してこられたラドゥシェフ氏から、スィヤーカト書体と呼ばれるオスマン朝の財務帳簿に用いられる非常に判読が難しい書体を学べる貴重な機会ともあって、のべ30人近くが日本各地から本セミナーに参加した。

セミナーのプログラム、セミナーで講読した史料は以下の通りである。

◆セミナー内容

7月27日 租税台帳におけるスィヤーカト書体 (Siyarat script in the Tapu Tahrir Registers)

7月28日 ジズヤ台帳におけるスィヤーカト書体 (Siyarat script in the Cizye Registers)

7月29日 アヴァールズ台帳 (The Avariz Registers)

◆セミナーで講読した帳簿

トルコ共和国首相府オスマン文書館 (T.C. Basbakanlik Osmanli Arsivi) 所蔵

TTD382 (Tapu Tahrir Defteri)

MAD90 (Cizye Defteri)

TTD771 (Avariz Defteri)

初日 27 日は、租税台帳を題材にあげて、そこから人口の推移のみならず地名の変遷や地域住民のイスラームへの改宗の程度、さらにはオスマン朝の軍事制度や財務制度、オスマン朝中央と地方関係といった幅広い情報を読みとることが出来ると、バルカン史研究におけるオスマン朝の財政帳簿の持つ意義や重要性を主に解説し、帳簿講読への導入を行った。2 日目の 28 日は、スィヤークト書体で書かれたニコポリス (Nigbolu) 県租税台帳 (TTD382) 及びルメリ州ジズヤ台帳 (MAD90) を用いて、帳簿の様式や用いられる専門用語、さらにはスィヤークト数字と呼ばれる独特な会計用数字の判読例を示し、時にはセミナー参加者と協力しつつ上記の両台帳を読み進めていった。最終日となった 29 日には、前日から続けてジズヤ台帳の講読と解説を行った後、ニコポリス (Nigbolu) 県アヴァールズ台帳 (TTD771) の講読を行い、最後にもう一度バルカン史研究におけるオスマン朝財務帳簿の重要性を訴えてセミナーを終えた。セミナーの中でラドゥシェフ氏は単に台帳を読み進めるだけではなく、台帳に書かれた項目や税目を基に当時の社会状況について解説を加え、それらの実例をもとに興味深い考察をいくつも述べられ、まさしく「一見したところ数字の羅列である台帳をどのように研究に役立てるか」という問題に対する鮮やかな解答を示された。

今回のセミナーにはオスマン史、バルカン史研究者に留まらない幅広い分野の研究者が参加したが、ラドゥシェフ氏はセミナー参加者の知識の差異にも充分配慮しつつ、オスマン朝における古文書、社会経済史研究の最前線を示した。惜しむらくは、帳簿の講読及び解説にはセミナーの所定時間が必ずしも充分なものではなかったこと、特に終了時刻が迫っていたがために最終日のアヴァールズ台帳の講読に充分な時間を割けなかったことがあげられよう。今後、「スィヤークト書体帳簿講読セミナー」セミナーが回数を重ね、上記の台帳のみならず様々な帳簿を学ぶ機会が訪れることを期待したい。

(文責 岩本佳子/京都大学大学院文学研究科西南アジア史学専修博士後期課程所属)

(2) 「オスマン朝のアヴァールズ税台帳について」

日時：2010 年 1 月 27 日 午後 3 時から午後 6 時

会場：東京外国語大学本郷サテライト 3 階セミナー室

講師：オクタイ・オゼル (ビルケント大学准教授、トルコ共和国)

<報告 1・概要>

本ワークショップはイスラーム地域研究東洋文庫拠点公募共同研究「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」の一環として開催された。ワークショップの講演者を務めたオゼル氏は、17・18 世紀を中心にオスマン朝初期史から近代に至るまでの幅広い時代と地域を対象に社会経済史研究からオスマン朝史のヒストリオグラフィーに至るまで精力的に活躍されている研究者

である。本ワークショップでオゼル氏はアヴァールズ台帳と呼ばれる史料郡を対象に人口研究上のアヴァールズ台帳の史料的価値や研究の可能性について話をし、非常に興味深い講演となった。

講演の内容は以下の通りである。

1. アヴァールズ台帳明細帳とは何か
2. トルコ共和国におけるアヴァールズ台帳研究史
3. 新知見
4. 人口研究の史料としてのアヴァールズ台帳明細帳、その問題点と限界
5. アヴァールズ台帳が秘める将来の研究の可能性

まず、ワークショップの前段としてオスマン朝における税制と台帳についての概説を行った後、台帳をめぐる研究の歴史に話を移し、アヴァールズ台帳が人口研究の史料として早くから部分的に利用されてきたが、それらの研究がアヴァールズ台帳の簡易帳 (icmal defteri) のみを補助的に用いた不十分なものであり、ともすれば台帳に記された世帯の数から総人口を推定する作業に終始していたという先行研究の問題点を指摘した。その後、オゼル氏を含めた若手の研究者を中心に、簡易帳よりもさらに詳しく人口、耕地等を記した明細帳 (mufassal defteri) を用いた包括的かつ詳細な研究がトルコ共和国内外で活発に行われつつあると研究の現状を紹介した。

続けて、オゼル氏が実際に研究で用いたアナトリア中部アマスィヤ県のアヴァールズ台帳を例にとつて、実際の台帳本文を示しながら台帳の記録フォーマット、用いられる用語や記号を逐次丁寧に説明し、アヴァールズ台帳からどのような事項を読み取ることができ、人口や当時の社会、経済状況を知る上で史料としていかなる可能性をアヴァールズ台帳が秘めているのかについて話をなされた。その中で、通常であれば台帳には記録されないアスケリー身分の者や免税特権保持者の人数、さらには寡婦までもがアヴァールズ台帳明細帳には記録されていることや、担税単位 (tax unit) であるアヴァールズ・ハーネ 1 つあたりの担税者の数といった人口研究を行うために非常に重要な情報までもが明細帳に記されていることを紹介し、オスマン朝の人口史研究の中で、「史料の不足」を理由に研究が活発に行われてこなかった 17・18 世紀においてもアヴァールズ台帳明細帳を活用することで十分に人口研究の余地と可能性があることを示された。

今回のワークショップには様々な地域、時代を研究対象とする研究者が参加し、質疑応答の際には、1 世帯あたりの人口をめぐってイランとアナトリアの事例を比較しつつ活発な議論が展開された。その中でオゼル氏はトルコ共和国における研究史を紐解きつつ先行研究の抱える問題を指摘し、今後、研究者はどのように歴史に向き合い研究を行っていくべきかについて語られた。本ワークショップは短い時間ではあったが、穏やかな語り口の中にオゼル氏の研究に対するひたむきかつ厳しい姿勢を感じさせる素

晴らしいものであり、オゼル氏とのさらなる交流と氏の研究の更なる深化発展を望ませるものであった。

(文責 岩本佳子／京都大学大学院文学研究科西南アジア史学専修博士後期課程所属)

<報告 2・概要>

この度のオクタイ・オゼル氏によるワークショップ「オスマン朝のアヴァールズ税台帳について」では、アヴァールズ台帳の研究史と研究史上の問題点、台帳の成立背景、性質、記録様式、利用価値について大変明快にご説明いただいた。アヴァールズ台帳について浅学な報告者にとっては、本史料についての体系的な知識を得るまたとない機会となった。

アヴァールズ台帳は、従来、その重要性よりも危険性の方が強調されてきたように思う。というのも、これまで主として用いられてきた簡易帳 (icmal defteri) に記されている『アヴァールズ・ハーネ』と呼ばれるアヴァールズ税独特の担税単位が、実際は何人の担税者から構成されていたのかが不明であるという史料上の問題点のためである。報告者自身もこれまで、アヴァールズ台帳が17世紀の人口研究上非常に重要な史料であることは知りつつも「利用に際しては十分な注意が必要な、問題のある史料」という負のイメージをもっていた。しかし今回、簡易帳ではなく明細帳 (mufassal defteri) を包括的に用いた研究をなさっているオゼル氏のご講演によって、アヴァールズ台帳の中に上記の問題をカバーして余りある、実に多彩な情報が含まれているという事実を知ることができた。また、本台帳のコンパクトかつ機能的な、汎用性のある記述様式には特に驚かされた。負のイメージにとらわれ看過してきた史料の重要性に、目を開かれた思いである。

以下に氏のご説明の概略を述べると、アヴァールズ台帳は政府が必要な時に必要な情報のみを調査し、作成したものである。そのため、タフリール台帳のように徴税に関する網羅的な情報が記載されたのではなく、作成時点で必要と思われる事項のみが記載された。その記述様式は、作成された土地の名前、担税者の名前、担税者人数、アヴァールズ・ハーネの数、徴税総額という基本的なフォーマットと、その中に記載されている担税者個人に関する様々な記号化された情報の組み合わせから成っている。後者の内容は、担税能力、所有地の大きさ、職業、既婚未婚の別、宗教、所有地の乾田水田の別など多岐にわたっており、それらが端的な用語や記号で示されている。アヴァールズ台帳はその後者の組み合わせを変えることで、政府の要求に応じてその時々で変わる調査内容を、同一の様式のもとに記述できるようになっていたのである。

このような台帳の性質は、一方では連続性のある情報を得ることを妨げ、史料として利用することを困難にもするが、もう一方では行政上必要な情報を端的に手に入れ整理することを可能にする、柔軟性・機能性の非常に高い台帳であったと評価できるのではないだろうか。報告者は、アヴァールズ台帳の記

述様式が場当たりの記載内容を混乱なく整理し、徴税を滞りなく行うための効率的な情報整理システムを確立し得ていたという点に大変驚いた。

和やかな雰囲気の中で行われたこの度のワークショップは、今後帳簿を利用した研究に取り組んでいきたいと考えている報告者にとって、大変勉強になるワークショップであった。講演をしてくださったオゼル氏、また開催者の皆様に対する感謝の念でいっぱいである。今回得た知見を活かし、氏が最後に提示してくださった「単なる数字の集まりから何を抽出するか」という、帳簿研究を行う上で非常に大切な問題設定の部分についても、今後自分の研究の中で探求していきたいと思う。

(文責 佐治奈通子／京大大学院文学研究科西南アジア史学専修修士課程所属)

3. 講演会の開催

以下の講演会を開催した。なお本講演会は東京大学東洋文化研究所との共催である。

(1) 「オスマン時代ブルガリア史についてのブルガリアにおける現況」

日時：2009年7月30日 午後5時から午後7時

会場：東京大学東洋文化研究所3階第一会議室（東京都文京区本郷 7-3-1）

講師：エヴゲニー・ラドゥシェフ（ビルケント大学客員教授、トルコ共和国）

<概要>

エヴゲニー・ラドゥシェフ氏は、今回のセミナーでは、ブルガリアにおけるオスマン帝国期ブルガリア史研究の歩みと今後の展望について、以下のような報告をなされた（なお、今回のセミナーは、前回2月のセミナーを踏まえたものであり、ラドゥシェフ氏の経歴と専門としての前回のセミナーについては、前回のセミナー報告を参照されたい）。

ブルガリアは、500年近くにわたりオスマン帝国の支配下であり、この期間に作成された膨大なオスマン語文書史料は、ブルガリアの歴史を知るために大変有益である。しかしながら、従来のブルガリアにおけるオスマン史研究はその領域内に関心が集中する傾向があり、同じオスマン帝国の支配下にあったアナトリアはもちろん、バルカンの他の地域にさえ関心が向けられることはほとんどなかった。例えば、1990年代初頭、16-17世紀のオスマン帝国における人口圧力の有無をめぐる国際的な論争があった。オスマン帝国の国家体制と社会体制の変化に関係する重要な論争であったにも関わらず、アナトリアが主な舞台であったためか、著名なN. Todorovを除くブルガリアの研究者はこの論争に参加することとはなかった。

このようにオスマン帝国支配期の研究について、もっぱら自民族と自国内の動向に関心が集中する傾

向は、他のバルカン諸国においても同様にみられたことである。それでも、戦前のブルガリアにおける研究には、注目すべきものがあった。例えば、N. Mihov, P. Dorev, V. Hindarov, G. D. Galabov は、一次史料に基づく先駆的な研究を海外において発表した。また、彼らやドイツから来た B. C. Nedkoff の薫陶を受けた、N. Todorov, V. Mutafchieva, B. Cvetkova といった戦後活躍する研究者たちも、オスマン帝国の土地制度、都市、統治機構のあり方を考察する上で重要な研究を発表している。

ブルガリアそしてバルカン諸国において、そのオスマン帝国期の歴史研究が自民族、自国史に限定される傾向があったことは、民族主義と共産主義という2つの思想の大きな影響を受けていたためである。民族主義とそれに基づく国民国家が誕生した結果、バルカンの国々の関係は良好なものとはならなかった。異なる民族が多数の居住するバルカンにおいて、民族主義を強調することで多くの悲劇が繰り返されてきた。今日でもバルカンの民族主義者たちは歴史の教訓を学習していないのである。そのことは研究者たちも例外ではない。

それでも、戦前は比較的自由な研究を行うことができたが、戦後に共産党政権が確立するとともに、歴史研究はマルクス主義の強い影響下におかれ、オスマン帝国期は、バルカン諸国が「オスマン封建制」という遅れた発展段階のもとでくびきのもとにおかれた時代として否定的に評価され、そのような見方から歴史を叙述することが強いられた。そして、研究者が共産党政府によって書かされた歴史観は、そのまま子供たちの使用する教科書の記述の基礎となっていたのである。戦後の研究、特に社会経済に關係する研究は、マルクス主義の影響を直接うけたために、最もうまくいかなかった分野となった。そのため、当時の研究を今日読み返すときには、マルクス主義的な修辞法に注意する必要があるのである。

しかしながら、共産主義体制の崩壊とその後の周辺諸国との関係改善によって、研究は良い方向へと向かっているといえよう。例えば、1993年にはじまったブルガリアとトルコにおける文書館の相互利用の取り決め、さらに学術交流とそれに基づく出版が盛んに行われていることは、その証であり希望のはじまりである。ブルガリアと他のバルカン諸国におけるオスマン帝国期の自国史研究の歩みから、我々が学ぶべきことは、思想信条によってではなく、あくまで一次史料に基づき、そこから事実を読み解くことの重要性である。

今回のラドゥシェフ氏の実体験を踏まえた報告によって、共産主義体制下の研究の問題点と研究者の苦勞をまざまざと知ることができた。報告は、共産主義体制下の研究にどのような問題があったか、という問題だけではなく、「学問の自由」とは何か、ということを考えさせる機会でもあったと思う。また、思想統制下における研究者の苦勞を踏まえ、先人たちへの敬意を欠かすことのない、ラドゥシェフ氏の姿勢に、単なる学識の深さだけではなく、実際にその苦境を経験した人間だけが共感することができる深い思いと人間的な暖かみとをかいまみるることができた。報告の概要を述べるにあたって省略しな

くはならなかったが、ラドゥシェフ氏の報告は、ブルガリアそしてバルカンの歴史研究の「暗黒時代」に触れる、やや深刻な題材を扱いながら、エジプトの文書館での経験、ブルガリアにおける研究書の出版事情、研究者の人となりにも触れるなど、前回の報告同様、終始ユーモアを忘れないものであった。

今回のセミナーでは、参加者の積極性が前回にも増して発揮されたといえる。ラドゥシェフ氏の報告を受けて、参加者との間で活発な討議が行われたことはもちろん、報告の前後には、この貴重な機会を逃すまいとする質問者が待ち受けており、ラドゥシェフ氏はそれに快くそして真剣に対応されていた。ラドゥシェフ氏のまたのお越しを心からお待ちするものである。

(文責 今野 毅／北海学園大学・札幌学院大学非常勤講師)

(2) 「オスマン帝国の人口史研究の試み」

日時：2010年1月28日 午後5時から午後7時

会場：東京大学東洋文化研究所3階第二会議室

講師：オクタイ・オゼル（ビルケント大学准教授、トルコ共和国）

<概要>

オクタイ・オゼル氏は、今回のセミナーにおいて、オスマン帝国人口史研究とその課題について、16世紀まで、17-18世紀まで、19世紀から今日にいたるまでの3つの時代に大きくわけて、以下のような報告をなされた。

オスマン帝国の最初の数世紀は、積極的な征服活動とスルギュン（強制移住）にともなう人口移動、イスラーム化の動きがみられた時代であった。そして16世紀になると、「パックス=オトマニカ」のもと、帝国各地では人口が増加した。このことは納税者、免税者を記録したタフリール（課税調査）台帳の分析から裏付けることができる。

17世紀には、天災、疫病、戦争、治安の悪化、そしてアナトリアとシリアにおけるジェラーリーの諸反乱の影響を受けて、人口の急激な減少が発生したと考えられている。17世紀以降になるとタフリール台帳はほとんど作成されなくなり、また17-18世紀に作成されたジズヤ（人頭税）台帳、アヴァールズ（臨時税）台帳は当初、研究者の注目するところとならなかったため、従来のオスマン帝国人口史研究においては、17-18世紀は人口史に関わる史料の欠落した空白期とみなされていたのである。しかしながら近年、ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳の分析から17-18世紀の人口史を解明しようという動きがみられるようになってきた。

19世紀になると、オスマン帝国は民族主義の時代をむかえ、諸民族の独立と領土の縮小に伴い、ムスリム=トルコ系住民のアナトリアへの大規模な人口移動が発生し、この動きはトルコ共和国成立直後まで

続いた。この時期のアナトリアの人口については、近代化を目指すオスマン帝国そしてトルコ共和国が、中央集権化を押し進め、臣民の把握、統制に専念する過程で作成された、テメットアート（資産調査）台帳、サルナーメ（年報）といった史料に基づき分析することができる。その一方で、国家による統制は自治や独立を求める民族集団と国家の間に深刻な摩擦を生み、その影響は19-20世紀におけるアナトリアの人口研究の分野にまで及んでいる。例えば、民族集団毎にこの時期の人口が算出、提示されているが、研究者の立場によってその数字は大きく異なり、様々な論争が続いているのである。

今回のセミナーは、これまでのオゼル氏の研究成果をわかりやすく簡潔にまとめたものであり、特にこれまで空白とされてきた17-18世紀の人口史研究が、ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳によって解明される可能性が強調されており、大変興味深いものであった。しかしながらジズヤ台帳とアヴァールズ台帳に基づく先行研究をみると、これらの史料の利用と分析にあたって、様々な課題を指摘することができる。例えば、これまでの研究に利用されてきたジズヤ台帳とアヴァールズ台帳は、納税者の詳細を記録した明細（ムファサル）様式のものに集中しているが、この様式の台帳の多くは、17-18世紀を通じて各地域で2回しか作成されていないのである。さらにこれら明細様式の台帳が作成される前後の長い空白期間を記録した、様々な種類のジズヤとアヴァールズに関わる文書群が大量に現存しているのであるが、これらについては、利用はおろか、分類、整理さえほとんどおこなわれていないのが現状である。そしてそもそも、ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳における納税者の記録から正確な人口を算出することが本当に可能であるのか、疑問視する研究者も存在する。

今回のセミナーにおいて、ジズヤ台帳とアヴァールズ台帳のさらなる利用、分析と、これらの史料が17-18世紀人口史の解明に有効であることを証明していくことの必要性を痛感させられた。オゼル氏とのさらなる研究交流を切に願うとともに、セミナーが常に有意義なものとなるように尽力されている方々に感謝するものである。

（文責 今野 毅／北海学園大学・札幌学院大学非常勤講師）

4. 外国人研究者の招聘

以下の外国人研究者を招聘した。

(1) エヴゲニー・ラドゥシエフ（ビルケント大学客員教授、トルコ共和国）

招聘期間：2009年7月25日から2009年8月2日

(2) オクタイ・オゼル (ビルケント大学准教授、トルコ共和国)

招聘期間：2010年1月23日から2010年1月31日

5. 海外資料調査

以下の海外調査を実施した。

◆トルコ共和国における資料調査

期間：2009年8月12日(水)～9月13日(日)

国名：トルコ共和国

出張者：齋藤久美子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー)

<概要>

報告者は2009年9月3日(木)から9月12日(土)までトルコ共和国イスタンブール市に所在する研究機関で資料調査及び収集を行った。この調査は、公募研究「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」(代表者：高松洋一)という研究課題を遂行するためのものである。

調査を行う予定であったスレイマニエ図書館については、断食月(8月21日～)開始数日前に突然、館内整理のために断食月の間閉館することを発表したため、調査をすることができなかった。同様に、調査予定であったバヤズィト図書館についても、現在建物修復中のために写本部門が閉鎖されており、調査を断念せざるを得なかった。このように、上記二研究機関での資料調査が不可能となったため、調査期間の全日を首相府オスマン文書館での調査にあてた。

首相府オスマン文書館では、オスマン文書史料における「イラン式簿記述」の用例を広く収集するという目的のもと、調査を行った。今回重点的に調査したのが租税台帳である。調査の結果、収集したのは、チェミシュゲゼク県簡易台帳、ディヤルバクル州簡易台帳(部族民に授与されたディルリク含む)、ハサンケイフ・ヌサイビン県簡易台帳(アクチャカレ、スイルト、ラッカ、スィンジャル、ハブル諸県含む)、ディヤルバクル州明細台帳(クラブ、テルヅル、アタク、ハサンケイフ、スイルト、ヌサイビン、アクチャカレ、スィンジャル、ハブル、デイリュラフベ、ジェツマーサ諸県)というディヤルバクル地方に関する四冊の台帳である。上記ディヤルバクル地方は、本年1月～2月に同文書館で清水保尚氏が調査対象としたアレppoとその周辺地域に隣接していることから、今後、二つの地域間での比較検討も可能となるだろう。

上記租税台帳以外には、シェフリゾル州ギョニユルル兵俸給簿、イエニチェリ兵俸給簿、オスマン王

家祝祭に関する会計簿、ディヤルバクル財務組織会計簿を始めとする文書史料を収集した。

◆トルコ共和国における資料調査

期間：2010年2月7日(日)～2月28日(日)

国名：トルコ共和国

出張者：清水保尚（東京外国語大学オープン・アカデミー講師）

<概要>

報告者は、2010年2月7日から2月28日までトルコ共和国のイスタンブール市に所在する研究機関で資料調査及び収集をおこなった。調査機関は総理府オスマン文書館とスレイマニエ図書館とその管轄下の図書館である。

資料の調査と収集の上で、スレイマニエ図書館とバズイト図書館では、簿記術と文書作成術に関するオスマン語の写本を調査した。総理府オスマン文書館では、帳簿の具体的な実例を知るため、会計簿、日々出納簿といった帳簿を中心に資料の収集をおこなった。

スレイマニエ図書館では、簿記術を一層多面的に理解するため、意思決定を様式化した文書の用例に当る必要を感じ、今回は文書の用例を集成したオスマン語の写本のデジタル画像を収集した。バズイト図書館では、ある研究書に基づき簿記術に関する写本を探したが、著者の記載の誤りのためか、その後の整理による変更によるものかわからないが、該当する資料を探し当てることができなかった。

総理府オスマン文書館では、報告者の問題関心に則し、昨年度に続いてシリアのアレッポとその周辺域と関わる会計簿、日々出納簿を中心に収集した。また、今回滞在中にトプカプ宮殿博物館文書館に所蔵される帳簿資料のデジタル画像が総理府オスマン文書館で公開された。このため、トプカプの文書館が豊富に収蔵しているメッカ・メディナの両聖都に金品を送るため設定されたワクフ（寄進財）に関するアレッポ関連の会計簿を、これまた前年度に続き可能な限り網羅的に調査した。

◆イラン・イスラーム共和国

期間：2009年8月3日(月)～9月3日(木)

国名：イラン・イスラーム共和国

出張者：高松洋一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）

<概要>

報告者は、2009年8月3日から9月3日までイラン・イスラーム共和国のテヘラン市に所在する研究機関で資料調査及び収集をおこなった。調査機関はイラン議会図書館とテヘラン大学である。この調査

は、文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」の委託費による「イスラーム地域研究」にかかわる共同研究課題の公募事業の一環で、高松洋一を研究代表者とする「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」という研究課題を遂行するためのものである。

資料調査の過程においては、財務術と簿記術に関するペルシア語の石版本を中心に調査を行った。19世紀には伝統的な簿記術が西欧起源の複式簿記にとって代わられたオスマン朝と異なり、イランにおいては近代に入ってもなお簿記術の伝統が継続していたため、その手引きとして石版の技法によって出版された近代の算術書が、研究課題の遂行のため非常に有益であるという示唆を得たためである。

またイラン・イスラーム共和国ワクフ慈善庁文書専門員のオミード・レザーイー氏と会見し、昨年イランにおいても伝統的な簿記術を専論として解説した研究書ジャヴァード・サフィーネジャード『スイヤーク書体』が現れたことを教えられた。著者のサフィーネジャード氏はイランの農村におけるボネとよばれる共同労働慣行の研究で知られた研究者であるが、トルコと異なり歴史研究の史料として帳簿に注目してこなかったと思われたイランの学会においても新たな動きが起こっていることを確認できた。なお今回は同書およびペルシア語石版本カタログ、イランの文書の透かしに関する研究書を収集することができた。

またイラン議会図書館においては、同館国際協力専門官マジード・サーエリー・コルデデ氏のご厚意により、DVD化されたイランにおける第二次大戦期までに刊行された書籍の総合カタログ3巻および史料研究の学術雑誌『バハーレスターン』3巻の寄贈を受けることができ、イランにおける史料研究の最新の学会状況を知る機会を得た。

◆イラン・イスラーム共和国における資料調査

期間：2010年2月4日(木)～2月19日(金)

国名：イラン・イスラーム共和国

出張者：渡部 良子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニアフェロー、東京大学他非常勤講師）

<概要>

この調査は、文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」による「イスラーム地域研究」共同研究課題公募事業「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」（研究代表者：高松洋一）の共同研究の一部である。

調査の目的は、イランに現存するペルシア語財務術・簿記術マニュアルの写本を、可能な限り網羅的

に調査・複写することである。2009年度の高松氏の調査は、おもに近代に刊行された石版本を対象としたものであったが、ペルシア語で財務術・簿記術を伝授するマニュアルを著す伝統はイラン高原で早くから確立されており、少なくとも13-14世紀モンゴル支配期以降、多くの作品が写本の形で残されている。これらのマニュアルは、オスマン朝、インド、中央アジアなどの財務術にも影響を与えたイラン式簿記術の発展と技術伝承のありようを明らかにする重要な史料であり、M. T. Daneshpazhuh、I. Afsharらイランの碩学により目録化が行われているが、一部作品が社会経済史的関心から校訂・研究されているのみで、財務・簿記術史という観点から作品群の全貌を明らかにしようとする試みはかつてなく、未調査の作品が少なくない。この公募事業では、これまでもトルコ共和国でこれらの作品の写本調査を行ってきているが、今回の調査は、膨大なペルシア語写本・マイクロフィルムコレクションを持つイラン・イスラーム共和国首都テヘラン市の写本所蔵諸機関でこれらの作品を可能な限り調査・蒐集し、イラン式財務術・簿記術の発展・伝承を研究する土台を整えることを目標とした。

Daneshpazhuhによる官僚技術文献目録“Dabiri wa Nieisandigi”(論文集 Hadith-i 'Ishq, vol. 1, Tihiran, 2002 収録)、Afshar校訂 Furughistan : Danishnama'-i Fann-i Istifa' wa Siyaq (Tihiran, 1378kh)の補遺による簿記術文献目録に基づく予備調査をもとに、テヘランの主要な写本所蔵機関であるテヘラン大学中央図書館、メッリー・マレク図書館、議会図書館の3館で、以下の調査を行った。

上記の目録や、写本カタログの情報をを用いる上での問題は、官僚の実務を想定して書かれた財務術・簿記術マニュアルと、数学文献の区別が曖昧だということである。これは目録の問題というより、財務・簿記術に関する叙述が数学・算術と明確に切り離せないというこの文献ジャンルの性質によるものであって、官僚の実技である財務術・簿記術が、伝統的なイスラーム諸学体系に位置づけられる数学との関わりの中で「学」として発展していったことを示唆している。このため、調査は目録に収録された作品1点1点を閲覧し、純粋な数学に近いもの、財務台帳・文書の書き方など財務術・簿記実務に近いものと、作品を分類してゆく作業を通して行われた。

・テヘラン大学中央図書館

海外の写本所蔵機関や個人蔵写本の膨大なマイクロフィルム・コレクションを持つテヘラン大学中央図書館では、財務術に関わる現存最古のペルシア語作品の1つと考えられる Ali b. Yusuf b. Ali Mustawfi の Lubb al-Hisab (no. 5231)、サファヴィー朝期 Shah Tahmasp に献呈された Ghiyath al-Din Abu Ishaq Muhammad Kirmani の Risala dar 'Ilm-i Siyaq (microfilm no. 4967)、Shah Sulayman に献呈された Muhammad Ali b. Muhammad Qasim の Mir'at-i Sulaymani (no. 3609)、カージャール朝期の Sulayman Farahani, Mukhtasar dar Qawa'id-i Siyaq wa Dafatir wa Hisab (microfilm no. 2838)を調

査・複写した。

- ・メッリー・マレク図書館

メッリー・マレク図書館には、現存するペルシア語財務術・簿記術マニュアルでは最も古い作品群に属するモンゴル支配期の作品の1つ、Risala' -i Sahibiyya 写本 (no. 3697/6) が所蔵されている。この他、同館では、カージャーール朝期の Haji Muhammad Karim Khan Kirmani の al-Istifa' を調査・複写した。

- ・議会図書館

議会図書館所蔵写本で特に注目に値するのは、Hasan b. 'Ali の al-Murshid である。ペルシア語財務術・簿記術マニュアルはモンゴル支配期から現存しており、すでにその時代、マニュアルの叙述に一定の形式が存在していたことが確認できるが、イル・ハーン朝前半期の高名な財務長官 Sadr al-Din Khalidi に献呈された al-Murshid は、同時期の他の財務・簿記術マニュアルより多くの情報を含み、マニュアルの形式や技術伝承のスタイルの後代への継承や変化を研究する上で貴重な史料となるだろう。

この他、同館では、同じくモンゴル支配期の財務術マニュアルとして有名な Falak' Ali' Tabrizi の Sa'adat Nama (no. 2464/2)、カージャーール朝期の Muhammad Mahdi b. Haji Muhammad Rida の Risala' dar 'Ilm-i Siyaq (no. 5093)、著者不明 Dhakhira dar 'Ilm-i Siyaq (no. 5378/1)、著者不明 Hisab-i Ahl-i Siyaq (no. 48/1) を調査・複写した。

この他、テヘラン大学中央図書館所蔵では、多数残されているカージャーール朝期の財務術マニュアルから時間が許す限り多くの作品を閲覧し、その形式を調査した。限られた日数の中で、イラン式簿記術マニュアルの蒐集という目標に関しては数多くの成果があったが、テヘランの Da'ir al-Ma'arif-i Buzurg-i Islami に所蔵される写本を調査できなかったことや、複数写本のある作品の写本を対照し、写本同士の関連や内容の差異を調べる時間がなかったことなど、様々な課題も残している。今回の調査結果を踏み台として、さらに広い調査が必要であろう。

6. 海外での資料購入

上記、海外資料調査の際に、関連資料を購入した。

- ・トルコ

総理府オスマン文書館で帳簿資料を、スレイマニエ図書館で写本史料を、補助資料として書店を通じてオスマン期の辞書などを購入した。

・イラン

スィヤーク（スィヤークト）書体の研究書を含め、カタログ等を購入した。

◎2010年度

1. 研究会の開催

昨年度海外出張にて購入した写本資料画像データを利用し、7回定例研究会を実施した。

会場はすべて東洋文庫拠点（第1回～第6回は豊島区駒込 1-3-1 メリノ六義園ビル5階、第7回は文京区本駒込2-28-21）である。

第1回 2010年4月21日

「2009年度イラン出張報告」

報告者：渡部良子

「今年度の計画について」

報告者：高松洋一

第2回 2010年5月21日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 *Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat* (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章の試訳と考察」

報告者：阿部尚史

第3回 2010年6月25日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 *Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat* (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章、p. 37から」

報告者：阿部尚史

第4回 2010年7月16日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 *Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat* (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章、p. 41、8行目から」

報告者：阿部尚史

第5回 2010年10月29日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 *Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat* (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章、p. 46、3行目から」

報告者：渡部良子

第6回 2010年12月3日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章、p. 48から」

報告者：渡部良子

第7回 2011年1月21日

「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 Resāle-ye Falakiye dar ‘elm-e siyāqat (ヴァルター・ヒンツ校訂) 第6章、p. 53、5行目から」

報告者：阿部尚史

2. 国際ワークショップの開催

日時： 2011年2月2日（水）15:00-18:00

題目： 16世紀オスマン朝の財務関係帳簿（言語：トルコ語（通訳付））

発表者： ビルギン・アイドゥン氏（マルマラ大学）

3. 講演会の開催

他の共同利用・共同研究拠点との共催講演会を開催した。

共催：東京大学東洋文化研究所、同研究所プロジェクト研究・班研究「オスマン帝国史の諸問題」

日時： 2011年1月31日（月）17:30-19:30

題目：「ディーヴァーン・ヒュマーユーンおよび関連重要文書体系の構造と変容」（トルコ語）

講師： ビルギン・アイドゥン氏（マルマラ大学）

4. 外国人研究者の招聘

ビルギン・アイドゥン（トルコ共和国、マルマラ大学）

招聘期間：2011年1月29日から2011年2月5日

5. 海外での資料調査

◆イラン・イスラーム共和国における資料調査

期間：2010年9月10日から10月5日

国名：イラン・イスラーム共和国

出張者：阿部 尚史（東京大学グローバルCOE 特任研究員）

<概要>

報告者は、本調査においては、主として19世紀後半から20世紀初頭にかけて、イランで執筆、出版された、財務・簿記術関連史料の収集を行った。そのうち、日本に複写を持ち帰った史料としては、写本の複写3点、石版本の複写8点である。この他、関連する文書についても、複写を招来した。

・国立図書館 Ketabkhane-ye melli :

主としてカージャー朝末期（19世紀末から20世紀初頭）のイランで、石刷出版された簿記術関連文献（Bahr al-javaher, Ahsan al-moraselat, Moraselat va siyaq）の調査を行った。

また、同書館では、イラン研究部門のジャアファリー・マズハブ氏とイランにおける簿記術研究とそれらを用いた経済史研究の現況について意見交換を行った。

氏によれば、現時点、イランにおいては、スィヤーク書体に関する研究としては、主として紹介的な研究、また半誌に重点が置かれており、スィヤークで書かれた財務関連資料を歴史資料として利用した、経済史、社会経済史、財政史などの分野はいまだに未開拓であるという。報告者も常々そうした問題点を感じていた。財務簿記術史料を用いた研究に関するワークショップの開催を打診されたものの、メリー図書館の研究部門の日程や報告者の帰国日程と折り合いがつかなかったため、この件については延期となった。

・議会図書館 Ketabkhane-ye majles-e showra-ye Eslami

19, 20世紀の簿記術に関する写本および石版本（Bahr al-javaher, Ta' limat-e ebteda' i, Kholasat al-siyaq）の調査を行った。調査の中で、同図書館には、Bahr al-javaher の写本が大量に所蔵されていることが明らかになった。

簿記術指南書の調査に加えて、イランの財務資料において、どのように簿記術が活用されているかを確かめるために、同図書館に最も体系的に所蔵されている、19世紀末の、アゼルバイジャン地方の徴税台帳の調査も同時に行った。

・国立公文書館 Sazman-e asnad-e melli

国立公文書館においては、主に19世紀後半のアゼルバイジャン地方に関連する文書史料、特に財務に関する史料を調査した。

同文書館の研究部門に所属するフリーエ・サイーディー女史（イラン近代史）と面会し、昨年および今年に女史が出版した文献をもとに、イラン史における文書史料活用の可能性について意見交換を行った。

また、同文書館の目録作成部門に属するアリー・キャリーミヤーン氏（文書研究・ホラーサーン地方史）とも面会した。氏は、スィヤーク文書の読解に優れる文書研究者である。現在、ホラーサーン北部ボジュヌールド地方の人口調査台帳の判読・分析を終え、印刷中とのことであった。この他にも、19世紀のヘラートの帰属問題に関する史料集も完成させ、現在、出版許可を待っているとのことであった。報告者は、実際にその草稿の閲覧を許され、ざっと目を通したところ、財務関連文書も利用した労作であることが分かった。

報告者のスィヤークの先生でもあるモフセン・ルースターイー氏（文書研究、スィヤーク文書）とも面会し、氏が出版を準備している『スィヤーク研究入門：歴史・行政文書40通の判読』について説明を受けた。タイトルからも分かるように、本書は判読を重視しており、スィヤーク独特の術語を判読するときの手引きとなることを目指している。同書が出版されれば、実際にイランのスィヤーク文書を用いた研究を遂行するにあたって、有用なリファレンスとなろう。

・テヘラン大学付属図書館 Ketabkhane-ye Daneshgah-e Tehran

同図書館においては、カージャール朝中期（1839/1255年）に執筆された、Qava' ed al-siyāq を閲覧した。同書は、簿記の実務に即して、諸項目・用語を説明する。他の簿記術関連史料とは若干傾向の異なる資料であり、その点でも興味深い研究対象であることが分かった。

この他、財務関連文書・簿記術、スィヤークについて個人的に研究を進めているパフマン・バヤーニー氏とも面会し、氏が所蔵する19世紀末の簿記術に関する石版本（Sahl al-Hesab fi' elm-e siyaq va mokatabat-e shar' i o' rfi）の複写を許された。同書は、報告者がイラン国内の公立図書館において調査しなかった作品であり、私蔵本から複写できたことは幸いであった。

以上、今回、調査の過程で明らかになった、2点について概括しておきたい。

まず第一点として、19世紀後半に執筆された Bahr al-javaher ('Abd al-Vahhab Shahshahani al-Hoseyni al-Esfahani 著) という簿記術史料が、写本、石版本ともに、大量に存在する点である。所蔵されている点数、また写本、石版本のヴァリエーションに注目するならば、この書籍が19世紀後半、いわば、スィヤークの教科書として第一等の地位を占めていたと理解することができる。また、写本間、石版本間の移動もかなり見受けられるので、可能な限り多くのサンプルを集め、その異同を調査することも、当時の簿記術を理解するために、一つの手法ともなるだろう。

第二点としては、19世紀後半の簿記術は、簿記術として独立して存在するというよりも、文章作法などとひと括りの分野として見なされていた点である。今回の調査で調査・蒐集した Ta' limat-e Ebteda' i や Ahsan al-moraselat va Ahsan al-siyāq, Sahl al-Hesab fi 'elm-e siyāq va mokatabat-e shar' i o 'orfi といった史料は両者を包含している。いわば、文章術と算術の両方を一冊にまとめたと言える。このことは、オスマン朝支配領域とは異なり、スィヤークが当時、一般的な算術的な知識として市井にまで広く受容されていたことを物語る。

滞在中、複写した石版本のうち、Sahl al-Hesab を例に、やや詳しく読解を進めたところ、同書は子供に教えることを目的とし、現在の教科書と極めて類似した形式をとる。例えば、第一節の説明が終わったら、練習問題が用意されており、一方的な説明だけでなく、生徒の知識の定着に留意していたことが確認できる。

また、報告者は、イラン人の知人（現在40歳前後）から、彼の祖父は、イランのタブリーズ市にて商人（主に茶を扱っていたという）であり、基本的にスィヤーク体で帳簿をつけていた、という（著者も実は、その帳簿を閲覧したことがある）。現存するスィヤーク教本的資料と、こうした証言は一致する。

ただ私見では、上記のような教科書的なテキストは、スィヤーク、算術の初歩を知り、当時の初等教育状況を知る上では有益なもの、同時代の政府や州の台帳等に記されている高度な簿記術を解明するには不十分であると考えられる。恐らく初歩的な算術と財務官僚が用いた簿記術の間を埋めるテキストとして、最初に紹介した Bahr al-javāher のような史料が有用となると考えられる。今後、取得した諸写本と数種類の石版本を比較しながら、詳しく読解を進めたい。

イランにおいて、スィヤークが幅広く受容されていたことは間違いないが、この問題についての具体的な研究は全くなされていない。今回蒐集した史料は不完全であるにせよ、上記の問題を探求する上でも、重要な意義をもつものと考えられる。今後、これらの史料を調査することによって、19世紀後半のイランにおける財務・簿記術の在り方の解明に加え、イランでは未開拓である財政史研究への糸口になることが期待される。

6. 資料購入

上記、海外調査のほか、関連資料を購入した。